未来社会における持続できる山林管理

禹　鐘春
韓国・江原大学助教授

要約

今まで世界中で適応されている山林管理の方法は、２１世紀の転換点に直面して、再点検される必要がある。時代のニーズに合わせて、山林は、今、世界で非常に深刻となっている環境問題をカバーすべきである。従って、ヨーロッパでは、「ほとんど自然な山林管理の方法」が起こり、応用されており、北アメリカでは、「生態系山林管理方法」が開発されている。しかし、これは根本的な治療方法ではない。これに対する一つの治療方法は、統一思想、つまり、「授受法」から提示することができる。

キーワード：「ほとんど自然な山林管理の方法」、「生態系山林管理方法」、「授受法」

序言

山林と木は人類歴史の始まり以来、人間と切り離せないほど関連している。原始時代からルネッサンスまたは「産業革命」まで、人間はただ自然から生活物資を使うだけだったが、山林を体系的に管理した記録はない。彼らはただ、あるがままの自然に与えられている資源を使うだけだった。果物、野生の食べられる緑色野菜、農耕や住宅のための材料などは、野原や山から難なく得られる。狩猟によって捕獲される野生の動物や鳥は、貴重な生活資料として使用できる。

しかし、天然資源は無限ではなく、限りある資源である。

これらの資源は人類歴史と共に人間のためにだんだんと開発され、応用されたが、もしこれらが限界以上に開発されたならば、これらは取り返しのつかない状況になるかもしれない。代表的な例は、人類の文明の４つの夜明けの場所、つまり、中国の黄河流域、インドのガンジス河流域、中東のチグリス・ユーフラテス河流域およびエジプトのナイル河流域である。繁栄の絶頂期には、人類の文明の４つの夜明けの場所周辺に厚い森林があったが、それらの厚い森林は文明の衰退と共に廃棄された土地となった。

また、中世のヨーロッパでは、森林は、森林の開墾、森林での放牧、産業革命後の住宅地と工業施設の拡張を通して、滅ぼされた。そのために、厚い森林の地域はだんだん減少し、山林資源管理は危機となった。この期間は山林開発史の「山林の搾取」と呼ばれている。自己意識の運動はその時期の後のドイツ中に起こり、山林の良き管理のために、山林管理の持続可能性思想が台頭し、山林に根づいた。

今日、我々が住んでいるこの世界は「地球村」となり、科学文明の中で非常に急速に変化しつつある。人々は、もし文明の高いレベルこの世界に実現したならば、この世界は住

むのに非常に良くなると考えた。
しかし、今、かなり多くの環境問題がある。空気汚染と水の汚染問題があり、世界の森林地域の減少は世界の気候問題に重要な影響を及ぼす。

自然の生態系が破壊されると、この世界は天然資源の喪失という危機に直面する。ついに、国連環境開発会議（ＵＮＣＥＤ）が１９９２年６月に、ブラジルのリオデジャネイロで開催された。「環境的に健全な持続可能な開発」（Environmentally Sound Sustainable Dvelopment, 略してＥＳＳＤ）という題目で、地球環境の問題、特に山林資源の持続可能な管理が、非常に深く話し合われた。その時から、山林資源管理は新しい方向に転換された。既存の政策は再チェックされた。

従って、未来社会における新しい山林管理問題を診断することは非常に意義があるのである。

山林の役割と山林管理

山林の役割は二つあり、一つは、木材生産の役割であり、（それは）いわゆる第一の役割または直接的役割であり、もう一つは第二の役割または間接的な役割と呼ばれているが、つまり、新環境順応、水資源の函養、国有地保護、大気浄化。森林リクリエーション、野生生物保護、情緒開墾、生物の多様性保護などの役割である。これらはおわゆる山林の公共的役割である。

今まで、山林管理は木材生産に焦点を合わせてきており、山林の公共的役割はおろそかにされた。ヨーロッパでは公共的役割を開発する努力の足跡が見出だされてきたが、韓国におけるこの足跡は、実質的には、１９８８年以来の山林資源制定計画後に初めて見出だされている。深刻な環境問題を通して、おろそかにされてきた山林の公共的役割に関する研究は、韓国林業における木材生産の役割の維持と共に、加速されている。大気汚染と水の汚染の処方に対する基本的な対策は、公共的役割の函養により、確立できよう。韓国の場合、政府の積極的な支援が不足している。

今日、山林管理の新しい方向が山林の二つの役割の結合において見出だされている。１９９２年のＵＮＣＥＤ以来、「持続可能な山林管理」に対する真の代案が、木材の生産の役割と公共的役割の調和によって、提示されることができた。

ヨーロッパにおける山林管理の新しい代案

ヨーロッパの多くの国々の中で、林業の科学的正当性と山林管理の歴史的伝統を持つ国は、ドイツである。ドイツで起こった山林管理の多くの方法は、ドイツの近隣諸国に宣伝され、非常に大きな影響を及ぼした。

ドイツは山林破壊による問題、木材の危機状況の克服を早くに経験しており、その経験を通じて山林の役割の重要性を発見することができたのである。最初、ドイツ人は持続できる木材供給のため、木材生産の役割の実現のための理論を確立した。この基本的な理論

でもって、植林から伐採まで安定したレベルの維持のために、持続可能性の思想が生まれた。

１９世紀には、古典的な自由市場原理による最大限の収益の追求のための新しい経済概念が林業に導入された。そのために、伐採期間は短縮され、自然な再生は人工的な再生に代えられ、広葉樹は針葉樹のために除去された。その結果、ドイツには、多くの針葉樹の立ち木があり、また、均等な年をへた立ち木があるのである。

１９世紀末には、公共的役割の重要性が認識され、山林管理の新しい方向がドイツで提示された。つまり、森林地の上述の二つの役割が森林計画において考慮され、いわゆる他用途の役割実現のための森林計画が始められたのである。

従って、ドイツは維持された体系的な森林管理を通じて豊かな森林国となることができた。第二次世界大戦後、ドイツは「ラインの奇跡」を起こし、偉大な経済大国となることできた。しかし、経済の急速な成長を通じて、環境問題が非常に深刻に起こってきて、森林は被害を受けた。森林の被害は様ざまな複合した理由で起こる。そのために、森林被害は一つの理由によることはできず、酸性雨による被害が最大であるように思われる。１９８０年代の中頃まで、被害の徴候はドイツにおいて全森林地域の約半分に現れ、木々は部分的に枯死しつつあった。彼らは森林管理が人口森林に集中し、同じ年代の純粋な立ち木は環境汚染に弱い理由を理解した。そのために、確立された管理方法が再チェックされたのである。この確立された管理方法は、多用途の役割の、持続された木材生産を維持することであった。しかし、近代社会は二つの森林の役割についてより詳細な、複合的な多様性を求め、すべての物にまさって人々は環境的に健全で持続可能な森林の役割の必要を認めた。

森林の経済性は重要であるが、より重要なのは森林の生態環境の安定性である。従って、同年代の純粋な立ち木の構造は、多くの種が全部一緒に存在する混合森林に、多層構造の森林へと変えられる。自然な再生は人工的な再生よりも好ましい。つまり、言い換えれば、人間が直接管理する人工の森林の期間を超えて、未来社会には自然の生態学的法則に同調的に管理される森林が必要とされる。ヨーロッパでは「ほとんど自然な森林管理法」が徹底して求められている。

北アメリカにおける森林管理の新しい代案

米国またはカナダは移民によって建国された。従って、森林管理の歴史は２つの期間に分けられる。移民以前のインデイアンの時代と移民後の開拓時代とである。特に、アメリカにおける森林管理の歴史は自然破壊から始まった。土地の開墾、「焼き畑」農業、木材伐採、工業開発、それに都市化により、厚い未開拓の森林は滅ぼされた。しかし、天然資源保護が、美しい自然保護の一つの方法として、静かに起こされた。アメリカで自然公園が指定された。

２０世紀中ごろ、多くの異なる森林機能を持続的に示すために、新しい管理システムが、

導入された。第２次世界大戦後、社会の各部分は急速に開発され、企業において大量生産とオートメーション・システムが建設され、近代化された。この社会的な雰囲気によれば、森林のサービス（公共的）機能が非常に重要になった。物資とサービスを同時に満足させるために、多用途という概念が森林管理の主要な目標であった。木材生産、アウトドア・リクリエーション、放牧、水源開拓、野生生物の環境、自然の景観の保護などの機能を総合的に管理できる技術が必要とされた。そのために、森林管理の一つのコンピューター・システムが開発され、今やコンピューター技術の発達により、用いられている。

今日、地球環境問題が高まり、多用途という概念が拡張され、森林管理に応用された。これがいわゆる「生態系森林管理」である。従って、地球温暖化、環境汚染による生態系の破壊、および生物の多様性の減少に取り組むために、アメリカにおける森林管理の新しい代案が模索されている。

統一思想による新しい森林管理法の照明

上述のように、荒廃した土地を復帰するために、植林が施行され、植林による森林管理により必要な資源が確保された。これが多くの国ぐにの森林の歴史である。また熱帯地において、森林は開発され使用されたが、森林を体系的に管理する実際のケースはない。熱帯林の監視制度があるのみである。人工的な森林管理によって栽培される森林は同年代の純粋な立ち木となり、環境的に非常に弱い。これらの森林は未来社会にとって、特に福祉社会にとって、多くの問題を持っている。

従って、リオデジャネイロでのＵＮＣＥＤ後の森林管理の新しい代案が２１世紀に向けて上げられている。つまり、「ほとんど自然に近い森林管理法」と「生態系森林管理法」もことである。これは、自然や森林の本性は保持されるべきであり、人間の干渉は減少されるべきであることを意味している。言い換えれば、森林管理法は２点――「環境保護」と「経済開発」――を調和させるように努められるべきである。しかし、我々は自然や森林に対する哲学的な見方を見出だすことができない。人間と自然との本来の関係を確立すべき価値観をもって、いかに自然の世話をするかを確立することが必要である。

人類史は木や森林と切り離せないほど関連しており、人類始祖の生活は木や森と共に始まった。人類始祖の堕落により、エデンの園から追い払われた。そのときから今日まで、木や森林は「神の目」からではなく、「人間の目」から見られなければならなかった。このことは、自然が造物主の指示や目的によって管理されず、人間自身によって管理されたことを意味する。従って、今やこの自然は、真の目的もなしに、破壊されている。

今日、ある科学者はこの現象を西洋諸国の自然支配思想の結果として批判している。言い換えれば、自然についての創造主の本来の目的と人間の関係が失われ、神の心情は人間の自然観から引き離されたのである。従って、森林が真なる主体または中心もなく管理されているように思われる。その結果、深刻な環境問題が今日のように起こされたのである。

この自然の、あるいは環境の問題は自然と人間との本来の関係を回復することにより、

解決されるかもしれない。統一思想においては、授受法があり、それは主体と対象の関係を非常に良く説明している。というのは、繁栄のために、主体と対象は神の心情を中心として非常によく授け受け、調和すべきである。

自然と人間との関係は主体と対象のようなものである。従って、自然環境と人間との関係は神の心情を中心として、「授受法」のように実現されるべきである。

さて、ある人は、今日の環境問題を解決するために、東洋の自然調和説または自然にやさしい思想を必要としていると主張している。そのために、「ほぼ自然な森林管理法」や「森林の生態系を持続的に維持できるような森林管理法」が２０世紀末に起こっているということは、時宜に適って当然なことである。しかし、管理方法を完全なものにするためには、神の心情が必要であるように思われる。

結論

今日、世界は、「地球村」の時代を前にして、急速に変化しつつある。２１世紀を見ながら、資本主義経済体制は限界点に到達しているように思われる。物質的な豊かさはむしろ環境を破壊し、心霊的な価値基盤をかき乱した。ワールドウォッチ研究所からの世界情勢に関する報告によれば、新世界秩序の構成原理は「環境の持続可能性」にあるという。つまり、人間の状況を長期的に向上するためには、それぞれの政府の第１の目標が「成長」ではなく、「環境の持続可能性」であるべきである。従って、近い将来、それぞれの国は環境と経済とを絶対に調和させる努力をすべきである。この相互関係において、森林の２つの役割は、上述の２つの要素を含むに十分である。自然は自然法の中で持続可能であるかもしれない。人々は神の心情を理解するために、自然に対する本来の立場を見出だすべきである。

「ほぼ自然な森林管理法」や「生態系法」のような新しい森林管理法が現れたということは幸運なことである。しかし、これは森林管理に対する真の哲学的な見方ではない。真の方法が、統一思想の「授受法」におけるように、人間と自然の本来の関係において、作られるかもしれない。

参考資料

英語の原文を参照されたい。